

マンガ『いわき発見伝』ができるまで…

マンガ『いわき発見伝』ができるまで……………

平成二年四月・いわきのひとたちや市外のひとたちに、「いわき」をもっとよく知ってもらおうと、マンガで「いわき」を紹介することになった。はじめはマンガ本の名前を「いわきなんでも一番」にしようと考えていた。

・マンガ化するためのシナリオづくりに向け打ち合せを行った。候補にあがったのは、「じゃんがら」「獅子舞」「中田装飾横穴」「白水阿弥陀堂」「いわき湯本温泉」「化石産出」「専称寺」「サンマのみりん干」「包装カマボコ」「市としての面積日本一」の十本だった。

・十本のシナリオができるかどうか、可能性調査にはいった。

・調査の結果、十本のうち、「サンマのみりん干」「包装カマボコ」「市としての面積日本一」の三本については、シナリオづくりやマンガ化が難しいということになり、最終的に七本のシナリオに絞り込んだ。

・いわき地域学會（里見庫男代表）と話し合いをもち、シナリオ制作に協力してもらった。

六月・七つのシナリオが完成した。化石産出のシナリオが「ハドロの森」、獅子舞のシナリオが「獅子の涙」、白水阿弥陀堂のシナリオが「徳尼伝説」、いわき湯本温泉のシナリオが「都々逸坊湯本温泉逗留記」、じゃんがらのシナリオが

「渦巻型のじゃんがら」、中田装飾横穴のシナリオが「中田装飾横穴」、専称寺のシナリオが「俳僧一具庵一具」と、それぞれのシナリオのタイトルも決定された。

・早速、シナリオ集と作品募集要項の印刷作業にとりかかった。シナリオ集は、白いカバーに、赤い色で「いわきのあたたかい記憶と、あなたのあつい情熱を……したい。」と書き入れた。A5判、八十八ページ、二千部印刷。

七月・シナリオ集ができあがった。カバーの白色と文字のやや沈んだ赤い色がマッチしていた。

八月・マスコミ発表を皮切りに、マンガ作品の募集を開始した。

・新聞報道などによってマンガ『いわき発見伝』の企画を知ったひとたちからたくさんの問い合わせが寄せられた。

・問い合わせは、いわき市内をはじめ、福島県内、そして、東京都、岩手県、北海道、宮城県、茨城県、神奈川県、山口県、愛知県、埼玉県、大阪府、三重県、岡山県からもあり、全国的な広がりを見せはじめた。

・応募の締切りは、十月三十一日。はたして何点の応募があるのだろうか？不安と期待が交錯する。

・市内の小学校の先生から「クラスで挑戦してみます。でもできるかどうかは、やってみないとわかりませんから……」との電話。

・市内の高校の先生から「美術部の子どもたちに紹介してみます。」との電話。

九月・「マンガいわき発見伝の企画はともおもしろいとおもいます。いざ作品を作

ろうと思えば様々な調査が必要になってきます。応募者がどのぐらいいるかはわかりませんが、少なくともその方々の目は、既にいわきに向けられていることは確かで、今回の企画の半分は、すでに成功しているのではないのでしょうか」という励ましの手紙が届いた。

・シナリオ集が品切れ。新たに、千五百部を増刷した。文字を青色にした。

・応募作品の第一号が郵送されてきた。「ハドロの森」だった。職場のみんなを先を争うように作品を鑑賞(?)した。みんな、ひと安心。

・マンガの書き方についての細かい問い合せがはいりはじめた。間違いなく何人かの人々が作品の制作に励んでいることを実感した。

十月・いよいよ締切りの月だ。さてどうだろう？ 七つのシナリオそれぞれに作品が寄せられるだろうか？

・マンガ作品を選考する委員の人選をはじめめる。

・中旬ごろから、続々と作品が届きはじめた。

・「マンガを描くため哲郎くんやハドロと一ヵ月以上も付き合いました。情が移ってしまっ、どうしてもハドロを殺すことができませんでした。いいでしょうか？」という応募者の手紙や、「私のふるさと・いわきのために書きました。」というメモなどが作品に添えられていた。

十一月・全国から二十六点の応募、しかも、七本のシナリオすべてに作品の応募があった。応募者の年齢構成が特に興味深かった。まず、〇歳から九歳までが一人、十から十九歳が九人、二十から二十九歳が七人、三十から三十九歳が六人、四

十から四十九歳が二人、そして、その他（異年齢グループ）が一組だった。特に、十代、二十代という若い世代の応募が多かったのは良かった。ただ、十代でも、それは小学生と高校生のみで、中学生の応募がなかったのは残念だった。また、応募者の地域別構成は、いわき市内が十六点、福島県内（いわき市を除く）が六点、そして県外が四点だった。

・選考委員会を開催した。選考委員には、マンガ家の山口太一さん、いわき地域学會代表の里見庫男さん、画家の峰丘さん、いわき明星大学コミックアート部の塩沢徳子さん、福島民報社いわき支社長の菅野輝栄さん、ミスいわきの川名貴子さん、菊地賢一いわき市企画部長の皆さんにお願いし、厳正かつ慎重な選考を行った。夕方五時から開催された委員会は、午後九時まで続き、次のような結果になった。

〔正賞〕

「ハドロの森」高橋清一（いわき市小川町）

「獅子の涙」(株)小松美術印刷所（いわき市平）

「徳尼伝説」佐藤由佳子（いわき市平）

「都々逸坊湯本温泉逗留記」白岩都司子（福島市野田町）

「渦巻型のじゃんがら」該当作品なし

「中田装飾横穴」分図艶へ本名 磯上知予子（いわき市常磐）

「俳僧一具庵一具」西かつみ（原町市）

〔準賞〕

「ハドロの森」柴田亜紀子（いわき市平）

「徳尼伝説」佐藤博（いわき市郷ヶ丘）

「徳尼伝説」あやちゃんへ本名 佐々木綾子（仙台市若林区）

〔特別賞・高校生〕

「ハドロの森」柴田亜紀子（いわき市平）

「徳尼伝説」蛭田智道（いわき市沼部町）

〔特別賞・小学生〕

「ハドロの森」吉田真弓（いわき市平）

「ハドロの森」古内理恵（いわき市平）

「ハドロの森」中島英斉（いわき市錦町）

「徳尼伝説」林森子へ本名 石川睦子、渡辺るみ子、愛川由佳里
（いわき市小名浜）

「渦巻型のじゃんがら」吉田彩、初瀬智子（いわき市小名浜）

「中田装飾横穴」セーロガントーイAへ椎名ちひろ、黒田有紀、筈崎理絵、
大竹亜由美（いわき市小名浜）

・ 選考結果を応募者及びマスコミに発表した。

・ マンガ『いわき発見伝』の制作にむけて、作業を開始した。

平成三年二月・マンガ『いわき発見伝』完成。

あとがき

マンガ『いわき発見伝』の企画は、「まちづくりの第一歩は、まず自分たちが暮らしているまちを知り、興味や愛着をもつことからはじまる。」という考えにもとづいてスタートしました。

マンガを読み終えていかがだったでしょう？ 「いわき」というまちが、今まで以上に魅力のあるまちに思えてきませんでしたか？

もし、この本を読んだ感想や意見などがありましたら、お寄せください。

マンガ『いわき発見伝』

平成三年二月二十四日 第一刷発行 ©

平成三年三月二十三日 第二刷発行

平成五年一月三十日 第三刷発行

平成七年三月三十一日 第四刷発行

発行・編集

〒970 福島県いわき市平字梅本二番地

いわき市長公室企画課企画係
電話(〇二四六) 二二一―二二一
(内線三三二二)

FAX(〇二四六) 二二一―三六六二

印刷

八幡印刷株式会社
福島県いわき市平字田町八二―一三
電話(〇二四六) 三三―四七二(代)